

# ウィリアム・ブレイクの《ニュートン》と「アルキメデスの死」

## —— 古典的逸話を用いた理性批判

慶應義塾大学 中嶋 康太

ウィリアム・ブレイク(1757-1827)の《ニュートン》(1795~1805年頃)は、彼の画業の中盤に制作された12枚の大色刷版画の一枚である。この作品は独特の描写や特徴的な構図から、現代に至るまで高い評価を受けている。しかし、作品の描写に着目すると、半裸で洞窟や海底を思わせる風景の中に座り、コンパスで図形を描いている状況は、18世紀におけるアイザック・ニュートンを表現する作品としては極めて例外的である。そして、このような特異な描写を持つこの作品は、ブレイクが抱いていた、想像力を重視し、対立するものとしての理性を否定的に見る姿勢の表現として解釈されてきた。

《ニュートン》について、先行研究では、システーナ礼拝堂天井画を始めとした典拠の指摘や、ブレイク独自の理性批判を示す独自の象徴としてのコンパスなどを通じて、《日の老いたるもの》などの他作品との関係性を含めた作品解釈が行われてきた。近年の研究は、1805年頃の印刷で新たに追加された、巻物に描かれた図形や海底を連想させる風景などに焦点を当てている。

これら一連の先行研究では、典拠に関する指摘や描写の分析が行われており、絵画理解の一定の達成が見られる。しかしながら、これらの分析はブレイクが1790年初頭以降の彩飾本で作り出した神話や、その挿絵に大きく依拠している。そのため、ブレイクの思想そのものの解明は進展するものの、詩の挿絵ではない絵画《ニュートン》の解明には研究の余地が残されていると言える。そして、ブレイクが若い半裸の人物像を通じて、彼の思想や独自の象徴に精通していない鑑賞者たちに、どのように自身の理性に対する批判を伝えようとしたかという根本的な問いには、更なる検討の余地が残されている。

そこで、本発表では《ニュートン》の中核である若い人物像に改めて焦点を当て、ブレイクが利用した典拠の可能性として、「アルキメデスの死」の逸話を指摘したい。アルキメデスは、古代随一の数学者であり、幾何の問題に没頭して殺されてしまったことは、18世紀英国でも有名なエピソードであった。また、ラファエロ《アテネの学堂》に描かれたブラマンテ像がアルキメデスと解釈されていたように、彼のイメージは一定の存在感があったであろう。それらに加えて、アルキメデスとニュートンの両者が数学者であったことから、当時の記述では結び付けて言及された。

その彼が、幾何学の問題に没頭していて殺されたという「アルキメデスの死」は、理性を通じて世界を解明しようとする試みが悲劇的な結果を招くことを示しており、ブレイクの理性批判と共通項を持つものである。こうしたエピソードとブレイクによる理性批判を題材とした作品との関連性を議論することで、彼が自身の思想を絵画によって表現するアプローチの一端を明らかにしていきたい。